なかがわ 広報

2015.10

町のイメージキャラクター
「なかちゃん」

No.121

●平成26年度決算報告 2
●共同指令センター運用開始のお知らせ 6
●臨時職員(町立保育園保育士)募集 10
●町立幼稚園・保育園新規入園時募集 11

広報展示室 Koho Gallery 第121回

秋季特別展　没後100年　小林清親展
―新しい時代の息吹と浮世絵の終焉―

髪にたくさんの飾りをつけて艶っぽい眼でこちらを振り向く女性。歯には真っ黒なお歯黒をつけています。

これは、天保期(1830-44)の吉原の花魁(おいらん)を描いたものです。江戸時代でもっとも華やかな時期ですので、女性の装いもゴージャスです。横兵庫(よこひょうご)という二つに割れた髷を結った頭には、簪(かんざし)が大小合わせて14本。笄(こうがい)という棒と二本の櫛もついています。全て鼈甲製で、黒い斑(ぶ)のない最高級のものです。

着物は私たちにも馴染みのある「鮎」の柄。この時期は、龍や虎、鯉、鷹、鶏、猫といった大胆な模様が流行りました。

女性の後ろには立ち食い蕎麦を売る蕎麦屋と客が乗る駕籠を担ぐ人足たちがいます。駕籠は今のタクシーのようなものです。

１枚の絵に人の顔が大きく描かれた浮世絵を「大首絵」といいますが、この作品は大首絵とほか２枚を組み合わせた３枚セットで売られました。江戸時代には「大首絵」を１枚だけで売ることはありましたが、３枚セットで売るのは明治時代の新しい試みです。丁寧に作られた作品ということもあり、決して安くはなかっただろうと想像できます。

この作品が作られたのは、明治29年。写真や石版画などの新しい印刷技術が日本で広まり、浮世絵が売れなくなってきた頃です。

作者の小林清親は、この時期、売れる作品を探して試行錯誤をしていました。自分の生きている明治時代ではなく、江戸時代を懐かしむような作品を大首絵の３枚続という新しい様式で描きましたが、この作品もヒットしたという記録は残っていません。この後も清親は細々と版画の制作を続けますが、明治30年代の後半頃には浮世絵版画から手をひいてしまいます。

「花模様　天保ノ頃」　小林清親

広重美術館では、清親の没後100年を記念し、小林清親の画業をたどる展覧会を開催しています。浮世絵界が衰亡していくなかで模索をし続けた清親の姿が、美しい作品の数々を通してきっと感じられることでしょう。

馬頭広重美術館　主任学芸員　長井裕子

【会　　期】

後期：10月17日(土)～11月23日(月)

【開館時間】

午前9時30分より午後5時まで
(但し入館は午後4時30分まで)

【ミュージアムトーク(展示解説)】

後期　10月17日(土)　午後1時30分～
当館学芸員

【休 館 日】

月曜日・祝日の翌日
11月2日(月)は開館し、11月4日(水)は休館いたします。

【入 館 料】

大　人　　700円(630円)
高・大学生　400円(360円)
※( )は20名以上の団体料金。
※中学生以下は無料。
※障がい者手帳等をお持ちの方・付き添い1名は半額

平成26年度
那珂川町観光写真コンテスト受賞作品

入選「伝統の舞」山中 富夫さん(宇都宮市)

撮影場所：富山

当日は大雨で撮影に苦労しました。
皆様立派な演技で、感心しました。(山中さん)